

視覚障害者向けの歩行支援システムの実用化

目の不自由な人たちの3人に1人が駅のホームで転落の経験があるという。障害物よりも「何もない空間」に危険がある。その危険を検知し全盲や弱視の人の歩行を支援するシステムの実用化を目指す。

ものづくり補助金を利用したきっかけ

当社の理念は「人に優しいマルチメディアをあなたと共に創造する」です。先代から経営を引き継ぎ、赤字を経験するなど苦しい時代もありました。当時、改めて理念を振り返り、当社が今あるリソースでできることを原点に立ち返って考えたこともありました。現在は業務系システムなどの受託開発、ソフトウェア開発のほか、教育や福祉分野も事業領域としています。福祉分野は、約20年前に手話の電子辞書「ムサシアルファ」という手話動画ソフトを開発しましたが、当社の原点とも言うべき製品で、今回歩行支援システムの開発に取り組むに至った動機の一つでもあります。ソフトウェア共に技術的なバックボーンがあったわけではなく、あくまで自社の経営理念からスタートしたものでした。

視覚障害者向け歩行支援システムは、もともと高崎商科大学の竹上教授（工学博士）と仕事で協力しているパートナー企業が開発を進めていて、技術的課題があつて

普及してほしいと考えています。それによって競争が促進され、視覚障害者だけでなく、年齢とともに弱視になる人を対象とした製品なども出てくれば市場がさらに広がると思います。

マーケティングは難しいですね。良い製品であることは認められつつありますが、「本当に売れるものなのか？」となると話は別です。他社の類似製品でも累計で100台程度が売れただけ、という話も聞いたこともあり、販売計画の予測が難しい点が今の悩みです。また安全性についても、仮に当社製品を利用した方が事故でも起こしてしまったらと考えると、眠れない時もあります。リスクやモニター実験数値をきちんと公表して、購入者に分かりやすい製品にしたいですね。

私たちは企業ですので、実用化して売上を上げ、利益をだして初めて事業化できたと胸を張って言えます。残念ながらまだそこまで至っていません。社内に向けても経営者として新事業の成果を示し、第二第三のアイデアを出せるようにしたいです。

一緒にやらないかと声をかけられたのです。補助金申請前から開発には着手したのですが、始めてみるとメディアの反響が予想以上で、これは後には引けないと感じました。さらなる事業化のストーリーを描くと開発資金も自己資金では不足すると分かり、ものづくり補助金に申請しました。

競争力の高い試作機が完成

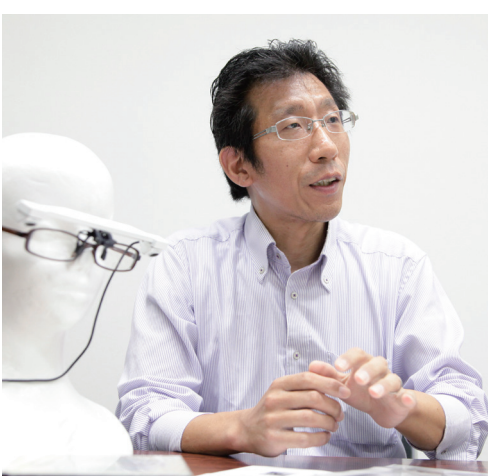
3人に1人の視覚障害者は駅ホームからの転落を経験したことがあるそうです。これまでの支援システムは障害物を超音波でキャッチするもの等が一般的でしたが、障害物の検知だけでなく「何もない空間の危険性」も検出が必要です。開発では画像処理技術を強化し、転倒や転落につながる落下危険空間の検出ができるようになりました。既に販売されている類似製品は100万円を超えるものでしたが、なんとか30万円で販売したいと考えています。最終的には10万円代まで下げることが目標にしています。事業期間には様々な福祉団体からお声がけいただき、3つの展示会に出展し100人



▲愛用しているメガネに装着可能



▲画像処理能力が向上。実用化は近い



▲この事業は使命感によるものと語る小湊 宏之社長

Company Profile 企業概要



▲本社外観 / 高齢者向けPCスクール（教育事業）も開講している

「人に優しいマルチメディアをあなたと共に創造する」を理念に、平成4年設立時から自社製品の開発に力を入れて取り組んでいる。現在では、ハードウェアの設計・開発から、ソフトウェアの企画・設計・開発・導入支援、人材派遣他、教育分野ではPCスクール「富士通オープンカレッジ」の運営を行なっている。ものづくり補助金では福祉分野で視覚障害者向け歩行支援システム開発に取り組み、福祉団体や行政、大学を始めメディアからも注目されている。

代表者名 小湊 宏之
設立年月日 1992年3月3日
所在地 〒211-0063 神奈川県川崎市中原区小杉町3-264-3ユニオンビル
従業員数 80名
資本金 5,000万円
Tel. 044-712-7481
Fax. 044-738-2237
https://www.alphamedia.co.jp

Examiner's Eye 調査員考察

試作品は空間認識力の向上と50%の軽量化、価格競争力も高く補助金により実用性が高まった。社会的課題を解決する製品であり、共感を生んだことで産学官と多方面からの協力を得て不足するリソースを補完している。小湊社長の採算性に対するこだわりからは事業を自立、そして継続させ、必要とする人へ普及させる責任感の強さを感じた。